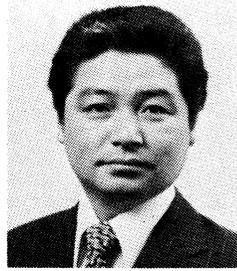


土谷さとるさん（北海道ブロック長）を訪ねて

―事務局―



質問1.

どんなきっかけで、いつから親の会にお入りになりましたか。おきかせください。

ちであり、加えて下の子（次女）がまだ1才で手のかかる真最中というころでした。いわばサンドイッチのような環境の中で長男は、一人遊びができてあまり親にまつわりつかない、長が泣きもしなくて夜も一人で寝れる、親にとっては手のかからない自慢の息子だったのです。

それが、何に故なのか、その自慢の息子が障害をもっているのと知らされたとき運命のいたずらを恨んだものでした。

当時私は、教職にあるうえ、日本青年会議所北海道地区協議会の会務担当副会長であり、少しは社会開発であるとか、教育問題、福祉問題に関心を示し、ときには積極的に発言もしていたのでした。ところが現実にはわが子のことに直面してみても、つくづくこれまでの己の認識不足、無理解を思い知らされたのです。

ちょうど私が親の会に入会した年の夏に、札幌で第10回言語障害児をもつ親の会北海道大会が開催される

とのことで、その準備に親も先生方も一つになって活動しているときでした。私もいわれるまま大会運営委員の一人として賛助金を集めるお手伝いをしたり、も

つぱら机や椅子を運ぶとかの力仕事を引き受けていました。そんな中であつてまず感じたことは、親の特にお母さん方の表情が非常に明るいということです。障害をもつ子供と共に嘆き苦しむ、血のじむような毎

りの境地にも似た表情や動きに驚かされました。

大会当日は、私達夫婦は運営委員でありながら分科会に出席させていただき、勉強させてもらいましたが、最も強烈なショックを与えられたのは、お茶の水女子大学教授田口恒夫先生の記念講演会でした。まるで自分達親子をモデルにして話されているのではないかと思われるぐらい強く胸にこたえました。自慢の息子がことばの障害をもつようになった原因の一つは、親のつくる家庭環境にもあったことを知らされ、この問題を避けては自分達の人生はないと覚悟をしました。

次の年に道協議会副会長として丹崎会長の代理で、全国会長会議や研修会に出させていただくようになって、改めて全国親の会の平岡事務局長をはじめ多くの方々の献身的なご努力とその情熱に接し、いままでの消極的な受身の姿勢を恥じました。いろいろな人との出会いによって教えられ54年から道協議会会長をお受けしていますが、いま一番励まされ、私のエネルギーの源泉は息子だと思っています。

質問2.

いままで北海道地区協議会（ブロック）でやってきたこと、また心がけてきたことを、おきかせください。

北海道における親の会運動は、昭和38年に「北海道言語障害児をもつ親の会」が結成されてからです。その参加呼びかけの案内書には、次のように書かれています。

「私ども言語障害児をもつ親たちは、共通する悩みをもちながら、これまで一人一人別々に悩み続けてまいりました。―中略―親たちが力を合わせてこの子らを守るために親の会を作り、共通の目的のために努力致すことになりました。―後略―」この呼びかけに、三〇〇人の人達が集ったのです。

昭和50年12月、コペンハーゲン発のスカンジナビア航空の機内で、たまたま隣の座席に乗り合せたのが、毎日新聞の大西康文記者でした。口が裂児に対する手厚い医療保障や、最初の手術から社会復帰までの一貫した治療システムやチーム医療の実態をレポートするため、デンマーク・スウェーデンに特派されての帰りだったのです。（帰国後、毎日新聞に連載、「谷間の国がい裂児」の名で本にもなりました。）いろいろな貴重な話を聞かせてもらいましたが、まさかそのときは、後にその問題に自分自身が深くかかわり合うなどとは知るよしもなかったのです。

私が、はじめて札幌地区言語障害児をもつ親の会に入会したのは昭和52年春のことでした。当時3才の長男がことばに障害があることがわかり、北海道真駒内養護学校言語治療学級の跡部敏之先生にご指導をいただくようになってからです。

その頃は、上の子（長女）が小学校に通い出し、なにせ親としても初体験のことばかりで注意が引かれが

発足当時は、言語治療教室が全国でも数えるほどしかなく、もちろん北海道内には一つもありませんでした。ですから運動のまず第一目標は、治療学級設置の請願からでした。そのかいあって昭和39年に真駒内養護学校に、41年には札幌、42年に釧路・小樽、43年に旭川・帯広と教室が設置されていきました。この間、治療教室担当の先生も毎年2、3名が東京に派遣され研修をうけるようになりました。

全道5市に教室が設置されるようになった昭和43年に、「言語障害児をもつ親の会北海道協議会」と改組し、名称も変えました。これまで全道を一本化した組織が、それ以後は、それぞれ独立した「〇〇地区言語障害児をもつ親の会」の連合体としての性格をもつようになりました。ですから北海道協議会は、全国親の会の一ブロックとしての役割をはたしながら、各地区親の会の緊密な連携をはかり、各地区での問題を全道的なものとしてとらえていく運動になっていきました。

「治療してくださる先生がほしい」「教室をつくって下さい」という運動は、昭和46年に北海道教育大学の中に待望の言語障害児教育臨時養成課程の設置をみることででき、また治療教室も現在では23市12町、一二一学級が開設されるまでになりました。そして各地区運動の集約としての全道大会を計11回、全道親子療育キャンプを8回、言語相談会を各地で8回開催してきました。

そんな中であって、やはり心に残る運動は、昭和50年から本格的にはじまった「兎唇・口がい裂児の手術や歯列矯正に健康保険と育成医療を適用してほしい」という一大キャンペーンです。そして署名運動等の運動をおして、無理解者だけでなく、いかに未理解の方々が多いかを知りました。親の会々員ですから、わが子のこと以外について「知らなすぎる」ことも気づかされました。

最近になってようやく健保適用が実現されようとしているとき、運動の輪を広げていくことがいかに大切であるか、長い運動の積み重ねがいかに必要であるかを痛感しています。

質問3. 現在、どんな問題（活動方針）を中心に活動されていますか。またどんな問題点がありますか。

昭和55年度北海道地区協議会の運動方針は、次のとおりです。

昨年の第11回全道大会のエネルギーを持続させると共に、各地区親の会の活動を更に盛り上げ、問題として集約された点を検討し、共通理解をはかると同時に組織を上げて努力する。

(1) 地区活動の盛り上げをはかる。

a、会の目的を自覚した会員を増やす。
b、会の組織、運営は会員の手で行うという姿勢を確立する。

(2) 各地区の人々への理解を深めるための活動。
c、各地区での問題を全道的なものとしてとらえる。

a、情報交換を活発にする。
b、会員の気づいた問題を大切に、地区の問題とする。

(3) 各地区の問題を集約し、全体の問題とする。
c、各地区的な問題を集約し、全体の問題とする。

a、組織の強化をはかる。
b、各種事業、行事の推進。……療育キャンプ・全道大会・言語相談会等。

(4) 幼児問題の取り組みと推進
a、地区幼児問題委員会の設置をはかる。
b、幼児問題の実態把握。

本会としては多くの問題をかかえています。現在の最大の問題点はなんといっても幼児問題です。道内二二市町村のうち幼児の言語治療の実施地区は、19地区にしかすぎません。その数少ない実施地区におい

ても幼児の定員・担当者数、その担当者の身分・待遇あるいは幼・小・中の一貫した指導体制等々、問題はつきません。

質問4. 今後 親の会の組織づくりや運営はどのようなべきか、ご意見をおきかせください。

すでに北海道に親の会が発足して18年、31の地区親の会に拡大されてきました。

しかし、いまだ治療教室の設置をみない地区で不安の中にも希望をかかえて運動している親の会や、ようやく運動の成果が実って教室の設置をみて燃えている親の会。かと思うと先人の苦労はつゆ知らずわが子は教室に通えているので親の会の存在すら必要としない親が多くなっている地区等々、千差万別です。

今から18年前、道内に治療教室がないため、父親たちと別居して遠く本州まで母子二人で治療に行かなければならなかった。そのお母さんが帰道後、「私の子どもは治ったからいいようなもの、こういうお子さんが道内に沢山いることを知って、黙っていられない気持ちになりました。」と、運動をはじめたのが北海道における親の会運動の出発点だったので。いま一度この原点にたちかえって、どこに住んでいても、いつでも、どんな子も、その子の必要とする治療のサービスを受けられるまではこの運動を続けていかなければならないのだと思います。そんな心がしみわたった組織づくりであり、会の運営にしようとしたちは誓い合っています。

一九八一年は国際障害者年です。願わくば、言語障害児とその親や関係者だけの運動というわくをもっと拡げて、社会連帯のかたちで「完全参加と平等」が実現できるように運動の見直しも必要なのではないでしょうか。